

# 看護学生に対する『いのちの授業』の取り組みと教授法の開発

## —小児看護学に携わっての初年度の実践—

粉川 妙子

東北文化学園大学医療福祉学部看護学科

### 要旨

看護教育において看護学生が“いのち”即ち、生と死を深く考えることは必要かつ重要である。今、学校現場（小・中・高等学校）では、保健室登校、不登校、いじめ、非行、自殺、さらには低年齢の子どもによる殺傷事件、保護者による虐待等々、様々な問題を抱えている。ここ数年、子どもたちが“いのち”について学ぶことにより、中長期的な展望のもと、前述した様々な問題を解決できる糸口になるよう『いのちの教育』の取り組みが各学校で実施されるようになってきた。図らずも、昨年3月11日の未曾有の東日本大震災により、教育現場では子どもの心のケアと共に、命の大切さを教える“いのち”の教育の必要性、重要性がさらに叫ばれている現状である。本大学の看護学生に、これまで『いのちの授業』を受けたことがあるかを聞いたところ、受けたことがある学生は1割にも満たなかった。そこで、『いのちの教育』を小児看護学のカリキュラムに位置づけ、看護を学ぶ学生の情意領域に焦点をあてた『いのちの授業』を実践すると共に、教授方法をも探り、今後の方向性についても検討を加えた。

【キーワード】 いのちの授業（教育） 生と死 看護学生 小児看護学

### 1. はじめに

学校現場（小・中・高等学校）では、保健室登校、不登校、いじめ、非行、自殺、さらには低年齢の子どもによる殺傷事件等々、様々な問題を抱えている。特に現在は、昨年起きた東日本大震災による被災児童の心のケアと共に、人間の生と死について成長発達段階を踏まえた“いのちの大切さ”を教えるいのちの教育（デュエデュケーション）の必要性、重要性が目立って見直されている。

文部科学省は、2008年3月に、小・中学校の

学習指導要領及び幼稚園教育要領を2009年3月に、高等学校・特別支援学校の学習指導要領を改訂した。小学校は2011年4月全面実施、中学校は2012年4月全面実施となる。2002年から実施されてきた学習指導要領の理念とされた「生きる力」を育むことは、今回の改定においても引き継がれている。

新学習指導要領<sup>1)</sup>に「生きる力」とは、『知・徳・体のバランスのとれた力であり、変化の激しいこれからの社会を生きるために……』と明記されている。子どもたちに「生きる力」を育むためには、各教科、道徳、特別活動、総合的

な学習の時間などを横断的に教育活動する中から生まれてくるものであり、学校・家庭・地域の連携・協力が必要であるとしている。

看護教育において看護学生が“いのち”を深く見つめ考えることは必要かつ重要である。このことを踏まえ、これまで教育現場で実践してきた『いのちの教育』の経験を生かし、本大学の看護学生2年生を対象に『いのちの教育』を試みることにした。(筆者は2011年4月より本大学看護学科で小児看護学を担当)

先行研究においては、看護専門学校<sup>2)</sup>で外部講師を招いての『いのちの授業』を単発的に実施したところは存在するが、看護系大学において看護学生に『いのちの教育』を系統立てて実践しているところはほとんどない。本研究の取り組みと実践は、これからの看護学生の教育における新たな試みである。

本研究では、『いのちの教育』を小児看護学のカリキュラムに位置づけ、看護を学ぶ学生の情意領域に焦点をあてた取り組みの効果と教授方法を明らかにすることを目的とした。

## 2. 方 法

本大学看護学科2年次学生に開講されている後期必修科目「小児看護方法論」のカリキュラムの中に『いのちの授業』を位置づけ、終末期の小児と家族の看護を取り扱う中で授業を展開した。『いのちの授業』の講義内容は3テーマである。1.【心はどこにあるの?】の授業は、「学生に心はどこにあるのか?」の発問から始まり、心と脳の関連性も含め、“心”に焦点をあて学生に思考させる内容である。2.【自分探しの旅にでかけよう】の授業は、ちょっと立ち止まり自分を見つめ直してみよう。自分の命について家系図を提示し、過去から現在そして未来へと続いていること、命は自他共にかげがえのないものであり、自ら絶ってはいけないし他の人の命も同じであることを伝える内容である。3.【いのち】の授業では、“有限の生”

に焦点をあて、命は限りあるもの、「生」を受けると共に「死」をも受けとる。このことに気づかせることをねらいとした。絵本『100万回生きたねこ』(佐野洋子著)と院内分校に在籍していた小学校6年生が書いた詩『命ってなんだろう』を紹介した。必死に命について考える6年生の子の姿を詩から読み取る。授業の後半にCD曲(さだまさし:奇跡~大きな愛のように~・新井満:千のかぜになつて)を聴かせる内容である。

講義終了後に受講した80名のレポートをまとめ分析対象とした。レポートは、テーマ『いのちについて考える』で提出されたB4サイズ2枚のレポートである。分析方法は質的研究の手法を用いた。レポートの課題3項目中の一つである“いのちについての自分の考えを述べなさい”から、『いのち』の捉え方として表現された単文を1記述単位として抽出し、その内容の意味が学生の思いを損なわないよう留意し要約した。さらに分析し、類似したものをサブカテゴリーとしまとめた。次にサブカテゴリー間の類似性、関係性を分析することで、情意領域に焦点をあてた『いのちの授業』の成果と有効性を明らかにすると共に、教授方法についても検討した。分析過程においては、判断の偏りを避け、信頼性・妥当性を考慮した。

倫理的配慮については、学生に研究の主旨と結果を公表すること、分析過程における匿名性の確保と個人が特定できないものであること、成績とは無関係であり研究への協力は自由意志であることを口頭で伝え書面で同意を得た。

## 3. 結 果

(1) 結果 I : 学生の思いを11項目のサブカテゴリーに分類した。

### I-1. 【有限の生の考え方】

○死を考えることは過去・現在・未来を生きるということを考えることに繋がる。

○いのち“有限の生”自分らしく生きること。

どう生きるかが大切なのだと感じた。

○いのち・死はとても遠くにあるように感じる。しかし実際は身近に存在している。

○「命の大切さ」とは死によって失われてしまう生の大切さ、かけがえのない命を表す。

○「命の大切さ」という言葉は、常に死と共にあるからこそ尊い命である。

○生きることで大切なことは、長さではなく密度。

○有意義な時間をどれだけ過ごすことができたかにより、その人の人生の幸せが決まる。

### I-2. 【家系図よりいのちのリレー】

○自分一人の視点からみれば、ちっぽけなものと思うが、命のリレーの先に自分がいるのだと考えると感動する。

○偶然があつて、私が生まれてきたことは奇跡であると思う。

○この世に生まれてきたことが、どれだけ素晴らしく貴重であるかを学んだ。

○自分の命だけれど、自分だけの命ではない。過去・現在・未来へと繋がっている。

### I-3. 【現代人の死生観の危うさ】

○現代人は“死”に対する考え方や向き合う方法を見失っている。

○核家族等の環境により実際に“死”に立ち会う機会が失われつつある。病院で死を迎えるケースが多くなっている。

○子どもや若者などの中で『死ね』という言葉を手軽に相手に言っている。

○テレビやゲーム、マンガ等により、バーチャルの世界で生と死の境界が曖昧。死が簡単に描かれている。生き返らせることができる。

○インターネットによる『ネット墓地』が登場している。

○デスエデュケーションを受けないことで、死の恐怖を受け止められない人が多いのでは。

○少年犯罪を無くすためにも、デスエデュケーションは必要である。

### I-4. 【これまでの死別体験（身内・友達等）で感じたこと】

○祖父の延命治療を通して、苦しそうな祖父を見て何を大切に考えればよいか悩んだ。

○年を重ねて老いていった時、延命処置はせず家族に見守られながら静かに息を引きとれたらと思う。

○友人、先生の死を経験して、死とは命とはその人のものだけではないことを痛いくらい伝わってきた。

○幼稚園の時、祖父の死について何の説明もされず、よくわからないまま葬儀が終っていたことを憶えている。（死がどういうものか。何が起きているのか。全く分からなかった）

○幼稚園の時、祖母が亡くなったという悲しい感情はあったものの、なぜ皆がここまで泣いているのか理解できなかった。

○自分の中で、今すぐには会うことができなくても、またどこかで祖母に会うことが出来るだろうと単純な気持ちであったと思う。

○祖母のホスピスでの死に対して、中学2年生であったが本当のことを知らされず、両親や周りの大人に不信感を抱いた。

○友人の死（白血病で亡くなった）に際して、辛い抗がん剤治療を受けていた時、友人は親にあまりにも苦しくて「私を殺して！」と言っていたという。将来看護師になった時、患者さんに寄り添い、少しでも力になりたい。

○高校生の時、友人の死を受け止めることができずお葬式にも参加できなかった。1年後やっと“もう亡くなったんだ”と友人の死を受容することができた。

○深い悲しみの中にいる時、非言語的コミュニケーションで接することが大事であることが分かった。どんな言葉をかけても伝わらないことを痛感した。

### I-5. 【デスエデュケーションの重要性】

○小6年生の佐世保の事件を通して、死んでも生き返ると思う気持ちが小3の時の自分にも

あった。祖父が死んだときに、「退院したら遊んでくれる」と約束したから絶対生き返ると思った。

○いじめや辛いことがあれば、安易に自殺すればよいという思う子どもがいるかもしれない。その予防教育としてのデスエデュケーションは必要である。

○小児のデスエデュケーションは必要。医療現場で命にかかわる病気などの治療をしている子どもたちが、自らの命について不安や疑問を持った時に静かに話し合える土台となる。

○小児の頃から、健康である子、病気を持っている子に関わらず、デスエデュケーションが重要。発達段階に応じた教育が必要。いつからどのように実施するか。

#### I-6. 【絵本(100万回生きたねこ)の読後感】

○心から愛する相手を見つけ、自分の生きる喜びや自由への喜びを感じることができたので、もう二度と生き返ることはなかったのだと思う。

○人生が一度しかないこと。その一度きりの人生をどう生きるべきかを伝えたかった絵本なのだった。

○何回生まれかわっても、人生に悔いが残るような生き方では意味のない人生になってしまう。

○相手からもらうだけの幸せでは自分に満足できず、自分から幸せを見つけることにより本物の幸せを手にすることができる。

○自ら動いて幸せを手にしようとする行動が生きることにつながっていくと思う。

#### I-7. 【院内分校6年生の書いた詩への思い】

○詩のタイトル『命ってなんだろう』を読んで感動した。命と正面から向き合って死を見つめて一生懸命考えている姿に。

○小6年生なのに命や死と向き合っている。自分には考えられない。今まで命に無関心であったことを思うと情けなくなった。

○小児の終末期は、成人や老年と違い看護が難

しいと感じた。

○命と向き合っている子どもたちは沢山いる。自分が看護師としてその子どもたちにかかわった時「命ってなに?」「死ぬとどうなるの?」と聞かれた時、どう対応すればよいか自分の中でしっかり考えていこうと思う。

○詩を読んで、命があることは嬉しいことであるが反面、すごく悲しいものだった。

○有限の生だから限りあるから、命は輝けるのかなと思った。

○命ってなんだろう。答えはなくてもいい。それは、誰にでもわかる単純な物ではないのだから。

○この詩をたくさんの方に紹介してほしい。

#### I-8. 【小児の死の概念形成の確認】

○講義内容“死の概念”(ピアジェ:アニミズム的感覚)より

- ・3歳ごろから周囲のできごとにより、死について考え始めると言われているが、この時期は自分や家族・友達など親しい人は死なないと考える。

- ・5歳ごろでは「動く」というような、目に見える現象や形態的な特徴から「生きている」ということについて考え、死後については死んでも生き返ったり、他のものに生まれ変わったりすると考える。

- ・7歳ごろからは、呼吸や大きくなること、成長することを生きていることと認識しはじめる。

- ・8~9歳ごろより生物や無生物の区別が付き、死後は「いなくなる」と受けとめる小児は半数近くになるといわれる。

- ・10歳ごろにはすべての人がいつかは死ぬという死の普遍性について理解しはじめ、死の概念について大人と近い理解をするといわれるが、それが自分におこるとは考えていない場合がほとんどである。

#### I-9. 【将来の医療従事者としての思い】

○看護師として技術の習得向上だけでなく、患

者さんに対する精神的な配慮を行い。患者さんと共に病気と闘う姿勢を持ちたい。

○医療従事者となる上で、多くの命に関わっていくたくさんの場面で、命のあり方を深く考えて学ぶ必要があると痛感した。

○看護師として、いのちについて自分の考えをゆっくり、しっかりと答えを求めて生きたい。

○看護職として医療に携わっていくということは、普通の人よりも生と死が間近に感じるということを自覚することができた。向き合って考えていきたい。

○子どもの死、残された家族の心のケア、心の傷を最小限にできるように工夫したケアを行える看護師になりたい。

○人にとって死は必ず訪れる。その中でその人がどのように生きていき、よりよい人生を歩むかが何より重要である。

○小児看護を目指したい。“いのち”というテーマについて答えが見つかるまで考え続ける。

#### **I-1 0. 【2011/3/11 東日本大震災の体験での思い】**

○震災でたくさんの方が亡くなったことで、こんなにもあっさりとして死んでしまうのかと無力感のようなものを感じている。人は胃が半分になっても、足がなくなっても生きていけるのに。○3.11の震災で“いのち”について考えた。この日常や命が当たり前ではないことをひしひしと感じた。そして今生きている“いのち”の尊さ幸せを感じた。

○自分の命は自分のものだけではない。祖先から引き継がれてきたもの。両親が大事に育ててくれたもの。震災後、今生きているこの命を大切にしていきたいと強く思う。

○震災で友達が亡くなった。一瞬の出来事で“いのち”が消えてしまった。“いのち”って軽いなあと感じた。友達が生きたかった分まで頑張るって生きようと思う。でも、不思議なことにならどどこかで生きているような気がして・・・

○石巻、一瞬にして当たり前のように営んでい

た生命が絶たれてしまった。何もできない自分に悔しさと無力感だけが残った。

○震災で家族や友人を亡くした子どもたちが多くいる。幼くして、人間の死を目の当たりにした子どもの心は傷つき、痛いほど死というものを実感していると思う。だからこそ、デスエデュケーションを通して、他者の死を受け止め、忘れることなく自分の心の中に刻み、自分の限りあるいのちを精一杯生きることが、亡くなった人の供養になることを教えていく必要があると思う。前向きに生きていくことができるよう支援することも重要である。

○3.11に起きた震災によって“死”を身近に感じた瞬間だった。これまで死や生きること、いのちについて考えることはなかった。たくさんの方が犠牲になり、変わり果てた景色、全ての人はいつか死ぬんだとはっきり実感した。

#### **I-1 1. 【今回のいのちの授業を受けたことで思ったこと】**

○生きているのが当たり前で自分が今ここにいる意味、尊さなんて考えようとしなかった。デスエデュケーションの必要性を感じた。

○これまで、自分の命なんかよりも他人が助かれば良いと。自分の代わりなんていくらでもいる。死んだらそれまでだから死んでもよいと軽く考えていた。しかし、講義を受けてそれは違うことに気づかされた。

○関係ないと思っていた死は、身近にあり、死を前向きに捉えていくことで新しい人生観を開けることができるのではないかと思った。

○一期一会 生きることの素晴らしさを感じた。

○命の重みを感じる講義であった。

○“いのち”に対する認識は、これまで曖昧ではっきりとしないものであった。しかし、今回、目の前に“いのち”について見つめる機会を与えられて、自分の中で感じる何かが、はっきりとした形になってきたように思う。

○寄り添うこと、いのちについて意識して考え

ることが大切だと感じる。

○いのちの授業は、生と死を考えさせるものであると同時に、いじめや自殺などへの抑止力になると思う。

○“いのち”はとてもかけがえのない大切なものであること。それに代わるものは何もないことを改めて講義を受けて痛感した。

○“いのち”を考えるとという過程が大切なことだと分かった。

○“いのち”の講義を受けて、改めて自分の体、いのちを大切に生きて行こうと心に強く決意した。

○今回の授業を受けて、死と生について改めて深く考えさせられた貴重な時間だった。いのちの大切さに改めて気づき、自分の考えを整理することができた。

○この講義を受けて良かった。いのちの尊さに気づけたし、いのちの教育の大切さも気づくことが出来た。答えが見つからなくとも、考えること自体が大切なことだと感じた。

○“いのち”について考える機会を与えられ、とても多くのことについて学ぶことができた。この看護学科でなかったら、いのちについて考えることなく過ぎて行っただろうと思う。早い段階で考えることができて良かった。これからいのちについて、さらに深く踏み込んで学んでいきたい。

○養護教諭として実際ふれあってきた子どもたちのことを聞いて、病院だけではなく健康児と患児が同じ環境で生きて行くためのサポート役（看護師）として支えていかなければならないと難しさも感じた。

（2）結果Ⅱ：11項目に分類したサブカテゴリーをさらに類似性、関係性を分析した結果、4項目のカテゴリーが抽出された。4項目Ⅱ-1～Ⅱ-4のまとめの中に、11項目のサブカテゴリーとの関係性のあった項目をⅠ-1～Ⅰ-11と表記し提示した。

Ⅱ-1【小児の時から発達段階を考慮しつつ、

『いのちの授業（教育）』の必要性、重要性を認識】

小児の発達段階に応じた『いのちの教育』は必要であることを認識した。

〔結果Ⅰ関連項目〕Ⅰ-1・Ⅰ-2・Ⅰ-3・Ⅰ-4・Ⅰ-5・Ⅰ-6・Ⅰ-7・Ⅰ-8・Ⅰ-9・Ⅰ-10・Ⅰ-11

Ⅱ-2【デスエデュケーションの重要性を意識】

デスエデュケーションは「死への準備教育」と訳されているが、有限の生＝死を意識することで、いかによりよく生きるかを考える上で重要である。さらには、自他のいのちの大切さを知るうえで重要である。

〔結果Ⅰ関連項目〕Ⅰ-1・Ⅰ-2・Ⅰ-3・Ⅰ-4・Ⅰ-5・Ⅰ-6・Ⅰ-7・Ⅰ-9・Ⅰ-10・Ⅰ-11

Ⅱ-3【いのち・死を考えることは自他の“いのち”の大切さを知ることにつながる】

『いのちの教育』の授業で“いのち”を考える時必ずその先に“死”が存在している。そのことを意識することでいのちの大切さを知り、自分だけではなく他人のいのちの大切さも知ることにつながった。

〔結果Ⅰ関連項目〕Ⅰ-1・Ⅰ-2・Ⅰ-3・Ⅰ-4・Ⅰ-5・Ⅰ-6・Ⅰ-7・Ⅰ-10・Ⅰ-11

Ⅱ-4【将来の医療従事者としての人間理解につながる】

看護職として医療に携わっていく上で、技術面の習得向上だけではなく、患者さんに対する精神面での看護の重要性を再認識した。さらには、医療従事者として、多く人々のいのちに関わっていく過程において、いのちについてもっと深く考えていく必要性に気づいた。

〔結果Ⅰ関連項目〕Ⅰ-1・Ⅰ-2・Ⅰ-3・Ⅰ-4・Ⅰ-7・Ⅰ-9・Ⅰ-10・Ⅰ-11

#### 4. 考 察

看護学生は『いのちの授業』を小・中・高等学校の教育課程の中で学ぶ機会があったと思

われるが、成長発達段階による理解度や情意の変化を認識し、繰り返しの学びの中で“いのち”について生と死を深く考える機会、考える過程が重要であることが4項目のカテゴリーから示唆された。

これまで筆者は小学校<sup>3)</sup>において、『いのちの授業』を子どもの発達段階に応じたカリキュラムのもと1年生から6年生までの連続性の中で『いのちの教育』という枠組みで実践してきた。A・デーケン<sup>4)5)</sup>によるデスエデュケーションの考え方、近藤卓<sup>6)7)</sup>、種村エイ子<sup>8)</sup>らの「生」と「死」をどのように子どもたちに伝え、教えるかの教授方法、山花郁子<sup>9)</sup>のブックトークの活用法などを参考に授業案を作成した。本研究においてもそれらは、授業内容に盛り込まれている。

看護学生と小学生との情意領域での差異については、『いのちの授業』を実施した年齢、即ち、発達段階の相違点や学生は看護師を目指していることを考慮すると、筆者の著書<sup>10) 11)</sup>の中の子どもたちと比較して、単純に有意差があるかないかなどと論ずることはできない。

『いのちの授業』を受ける時期としては、理想的には小学校低学年から学校教育に位置づけられ実施されることが望ましい。しかし、たとえ『いのちの授業』を受けてきたとしても、年齢とともに成長発達している学生の受けとめ方も違ってくるはずである。『いのちの授業』は形や内容を変えながら学ぶ機会を与えられる必要があるだろう。

『いのちの授業』を小児看護学に位置づけ実践したことについては、小児看護の対象である子どもへの理解を深めることにも繋がったと考える。何よりも今回の『いのちの授業』の講義を通して、学生自身が立ち止まって自分を見つめ、いのちを見つめ、生と死について考える時間を持つことができたことが成果の一つである。

今後、実践結果の内容を踏まえ、看護学生に

“いのち”を伝えるための授業を『いのちの教育』という大きな枠組みで捉えていく必要がある。1年次学生の後期に開講する必修基礎科目「生命倫理学」との関連性も重視しなければならない。さらには、教員間の共通理解と連携も大切である。

看護学生の教育に添った『いのちの教育』のカリキュラムを考え、教授方法や教材開発も探りながら、次年度へ引き続けていくことが重要である。

## 5. おわりに

『いのちの教育』とは、いのちの大切さ、生の素晴らしさを実感し、主体的・自主的に生きる力を自分で体得することである。いのちの終わりである「死」を見つめることは、他ならぬ「生」を見つめることである。有限の生を知ること、よりよく生きることの大切さに気づくことをねらいとしている。将来、看護師を目指している学生の情意領域に“心に響き心が動く”よう学生一人一人が自分を見つめ、生きるこの意味、いのちのはじまりを学び、その中で死の意味をも学ぶことできるカリキュラムを作成していきたい。

最後に、朝日新聞<sup>12)</sup> 2012年2月5日に掲載された記事を紹介する。文部科学省の生涯学習のあり方の会議報告書案の中で「現在の日本社会では、死の実感が生活、意識、医療、教育などの社会の様々な面から抜け落ち、『死』と向き合う経験が減少してきている」との認識を示し、「死と向き合うことで生きる意味を見だし、今、生きているこの一瞬を大切にすることができる」と記述している。さらに、会議の担当者は「教育分野でも『死はデリケートな話題だから』と避け続けるわけにはいかない」と言述べている。今後の『いのちの教育』に反映されることを期待したい。

## 6. 参考文献

- 1) 文部科学省「新学習指導要領の基本的な考え方」  
2008年
- 2) 中村智恵子：「いのちの授業」を看護学生に  
「看護教育」Vol.49 2008年 P1000-1003
- 3) 仙台市立木町通小学校「教育計画」2010年  
P89-96
- 4) A・デーケン編：死への準備教育第1巻 メヂカ  
ルフレンド社 1990年
- 5) A・デーケン編：死とどう向き合うか NHK出  
版 1998年
- 6) 近藤 卓：いのちを学ぶ・いのちを教える 大  
修館書店 2002年
- 7) 近藤 卓：いのちの教育 実業之日本社  
2003年
- 8) 種村エイ子：「死」を学ぶ子どもたち 教育史料  
出版会 2000年
- 9) 山花郁子：いのちをみつめるブックトーク  
かど創房 1997年
- 10) 粉川妙子：宮城教育大学大学院修士論文「小学  
校におけるいのち（生と死）の教育への試論」  
2005年
- 11) 粉川妙子：「はぎ」第52集 2010年 仙台市小  
学校教育研究会保健研究部会 P49-53
- 12) 朝日新聞「人生の締めくくり方も学習：文科省  
会議より」2012年2月5日掲載



# A Series of Lectures on “Life and Death” for Student Nurses

Taeko Kokawa, M.A.

Department of Nursing, Faculty of Medical Science and Welfare,  
Tohoku Bunka Gakuen University